

## 「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter（4）添付ファイル

### 【投稿】

#### 宇野没後30年研究集会での議論に思う

山口重克（東京大学（名））

宇野理論を継承していたはずの人達の間で、近年、制度派的な議論が増殖している。段階論なら制度を持ち込むのは当然であるが、原理論に制度を持ち込むことになると、原理論と段階論の境界がなくなり、この理論は宇野理論ではなくなる。もちろん意図的にそのつもりの人達については、それはそれで一向に構わないが、宇野理論のつもりでいる人達は、原理論の定義を改めて明確にしなければならないだろう。

原理論では、資本主義の本質ないし定義が規定されているという点は異論のないところだろう。それ以外に原理論には分析用具としての役割があると私は考え、これまでどちらかというとその面の研究をしてきた。しかし、制度派の影響が浸透しつつある今になって考えると、本質の面の確認を疎かにしていたかなという感がしている。永谷の「コメント」の中に「本質」を「正体」といいかえているところがある。ややマイナスの価値判断のニュアンスがあるいい方かも知れないが、市場経済批判の学の用語としては「本質」よりも意図が明白でいいかも知れない。

さて、それでは私はこの本質ないし正体をどう考えているかという問題であるが、制度学派的なマルクス経済学を主張する横川は「発言」で次のように述べている。「基礎理論は、労働力商品の再生産メカニズムの自律性に基づく価値法則（資本主義経済の自律性）を説明する。サブシステムをブラック・ボックスに入れると、資本主義経済の安定性を説明することが不可能であり、この場合には資本主義市場経済に内在する不安定性のみが強調される。不安定性と安定性が並存する資本主義のダイナミズムを明らかにするためには、サブシステムを入れざるを得ない」と。

ここには私の資本主義の本質 = 正体論は純粋資本主義論でなければならないという考え方との対置、すなわち純粋資本主義論と制度学派的な基礎理論との対比が明確に提示されている。私は正体論としては、資本主義の本質は不安定性であり、原理論はそれを強調しなければならないと思う。社会としては安定が必要であるが、純粋資本主義には安定性がない。故に資本主義社会には安定化装置としての制度が必要になる。不安定な正体が明らかにされていないと、この制度の必要性も明らかにならない。これを明らかにするのが、段階的、地域的に異なる安定化装置としてのサブシステムを入れた理論としての段階論・類型論である。宇野の原理論 = 純粋資本主義論は純粋経済理論であって社会理論ではないから、社会理論としては虚構の理論である。現実論としての社会理論であるためにはサブシステムが必要になる所以である。

それでは資本主義経済の不安定性は原理論ではどこに現れているか。象徴的には景気循環、とりわけ不況、失業、その結果としての貧困化である。この失業と貧困は不断に存在し累積するものではなく、循環的に発生しては解消される現象ではあるが、このこと自体が不安定性の1側面である。それに、どのような周期で自律的に回復・解消するのかということも理論的には確定が困難である。不況から好況への転換は、何れは生じるとしても、不況をどのくらい放置しておけば生じるのかが不明で、したがってその間は失業と貧困が継続し、餓死者が出るかも知れない。このような不安定性、不確定性が資本主義経済の本質であることがまず確認されることが必要である。

従来も宇野原理論の理解の仕方として、原理論ないし純粋資本主義論は、景気循環を論証したことによって資本主義経済が自律的かつ持続的に展開可能な側面を持っている点を論証しているというものがあつたが、制度学派的マルクス経済学は、その点を論証するためには純粋資本主義論では駄目で、制度論による補完が必要であるというのであろう。

こう考えてくると、宇野の原理論が、独自の価値法則論 = 自律的均衡編成論に力点を置きすぎて、それが景気循環という特有な過程、つまり一時的にせよ失業・貧困を伴うという重大な欠陥を持つシステムである点を余り強調しなかった点に問題があつたのかも知れないと思われてくる。

馬場宏二が現代資本主義の特徴として強調している過剰富裕化は、資本主義のある段階のある地域の類型の問題であつて、資本主義の本質論あるいは変化した本質論として主張されているのではあるまい。実際、先進的な資本主義国のある階層に過剰富裕・過剰消費が存在しているのは事実としても、その裏側に域内格差ないし低開発地域の超失業・超貧困状況が並存しており、それには先進地域の過剰蓄積のしわ寄せ収奪に起因している側面があるとも考えられる。この表裏の状況は、資本主義市場経済の本質の1つの現象形態といえるであろう。

集会の報告ないし発言の多くに資本主義が変わつたのに原理論が、つまり本質論が変わらないのはおかしいという議論があつた。中には、古い理論に固執しているのは脳天気だという人もいた。資本主義が資本主義でなくなつたのなら本質論は変わらなければおかしいが、資本主義のママなら本質論が変わらなければならぬというのはおかしい。もっとも資本主義のママで資本主義の本質が変わるといふこともあるといふのかも知れないが、その場合にはこの資本主義バージョンの本質は何かをいわなければならない。80年代までのいわゆる国家独占資本主義ないし福祉国家資本主義、あるいはいわゆる混合経済についてなら、資本主義が変わつたという議論もある程度は成立するかも知れない。しかし80年代以降の、現代の資本主義はどのように変わった資本主義なのか。暴走する資本主義とか凶暴化した資本主義とか倫理のない資本主義といった呼び方をする人もいたが、これらは変わった資本主義というより、旧来の資本主義そのものではないか。

以上で、本質論としての原理論について、別に古くなつたとはいえないのではないかということ述べたが、それでは原理論のもう一つの役割である分析用具の側面の方はどうなのか、古くなって役に立たなくなつていふのかという問題が残つていよう。この問題については機構論の効用として今までに何度か論じる機会があつたので、ここでは多くを述べないで、一言だけ述べておこう。

純粋資本主義というのはいわば裸の資本主義である。はじめから制度という衣服をまとっていると、どうして衣服が必要なのか、どこに衣服が必要なのかが分からない。本質が不安定ないし不確定性であることが確認されれば、制度がこの欠陥を除去ないし緩和する役割を持つものであることは確認出来る。しかし、その制度が果たしてその役割を果たせるのか、それはどのようにしてその役割を果たすのか、といった問題については、単なる本質論とは別に機構論が必要になる。従来原理論の機構論では必ずしも十分ではないといふ問題はあるかも知れないが、つまり補足は必要かも知れないが、古くなって役に立たなくなつていふとはいえないのではないかと思つている。